

## 伊勢御師と宇佐宮

惠良宏

生家近辺にも宇佐神領があり、その鎮守八幡宮にも興味深い神事や伝承がある。また近年、文書史料も発見されているので、これを紹介したいと思つたが、伊勢に住んで十年をへて、豊前への帰省も少なくなつた昨今、調査も思うに任せない。幸い、神宮文庫を利用して頂く機会も多いので、伊勢に残る御師史料と宇佐宮に関する史料をとり上げ、中世末期に伊勢信仰が豊前地方、或は宇佐宮内に及んだ状況を考察する一助としたい。元來御師おんしの活動は、各地に出向き、伊勢の信仰をとき参宮をすすめる師檀関係を結んだ上で、御被大麻や伊勢の土産、嘉例状という書状を配る。その上で檀那から応分の初穂或は物品・所領等の寄進を受けるものであった。史料的には、御師の賦帳くはりとよばれる名簿、檀那からの祈禱依頼状、御枝の受取状が中心である。稀には嘉例状や御枝の実物が残り、伊勢の神号の軸が残ることもあるが、殆どの御札を新年にはとり替えると同様に、古い物は処分されて残ることが少い。現存史料の中心は「御枝賦帳」であるが、これとて、例えば伊勢神道と宇佐八幡宮とがどの様な思想的影響・交流があつたかなどは知るべくもない。単なる名簿ではあるが、宇佐宮の神官・供僧の多くが御師の御枝を受けている状況がうかがえるのである。

宇佐宮は周知のように、八幡宮の絵本宮であり、八幡信仰の根源である。一方伊勢神宮の伊勢信仰もわが国における神祇思想の双璧をなす存在である。この二大信仰がどの様に接し、また夫々に受容されたかについては、極めて興味深い問題である。八幡信仰は伊勢信仰が全国的に拡大する以前に、全国的に宣布され、源氏をはじめとする武家を中心に受入れられ、東国

にも広く及んでいる。仏教とも早く習合して、上下の階層に浸透した。これに対して伊勢神宮は、古来「私幣禁断の制」によって、貴族以下一般民衆の祈禱・奉幣などの行為も禁止され、まさに天皇の祭祀、皇室の氏神として他社と厳然と区別された存在であったが、律令制の衰退による国家庇護が後退すると共に、神宮の神官・神人による信仰の弘通や神領の獲得活動が盛んになって、やがて私的祈禱の取次や所領寄進の口入(仲介)を行う人々が出現する。後世「御師」とよばれ、その活動が早く栄えた熊野御師や他寺社のそれを圧倒して、御師の代表的存在にまで成長する。中世後期には神領の御厨・御園の崩壊が進み、神宮経済の窮迫や式年遷宮の欠怠から、更に全国的に活動範囲をひろげ、それまで西日本、特に九州の地には及ばなかった御師の進出が始まる。平安末以来、全国の莊園・公領を問わずに賦課された神宮の遷宮費用に役夫工米の徴収も、九州は宇佐宮造宮のために課せられなかったし、神宮領も九州には設置されなかったことも伊勢信仰が及ばない原因であったかも知れない。出雲・熊野の信仰や天神信仰・修験道も九州では早くから盛んであったことも加わっている。

中世後期に、宇佐宮から各地へ御師的なものが進出したことは管見に入らないが、おそらく伊勢御師と同様、大内氏や大友氏等の戦国大名に勸進を行ったことは充分に考えられる。御師の活動とはやや性格は異なるが、応永以降の大内氏による八幡宮造宮や行幸会等祭事の外護・授助はその結果であろう。また朝廷をのぞいて九州以外や各地の農村内部にまで進出したことは明らかではない。一方の伊勢御師は東国から畿内・西国・中国諸国へ下向し、やがて九州諸国に入って、各地の有力者を中心に檀所を組織して行く。宇佐宮の神官・社僧もその御枝大麻を受けて御師の檀那となって行ったことが知られるのである。

伊勢御師と宇佐宮神官層との結びつきは何時頃から行われたかを明確にする史料はない。また九州に御師が進出する発端についても不明である。おそらく京都と深い関係をもった大内氏を通じて、その支配下にある北九州に先ず活動の足がかりを得たものと推測される。大内義興は明応八年(一四九九)以来山口に下向していた將軍足利義材を奉じて永正五年(一五〇八)上洛し、十五年(一五一八)まで京都に在って活動したが、その間に伊勢御師と出会ったものであろうか。「大内氏実録」によれば、永正十五年十月五日、義興は山口に帰着して、神明社を山口に勧請せんとする宿願を果すために、宮地を山口の西南高嶺

山麓に定め、十一月三日には新始の式を行い、翌十六年十一月三日、先ず内宮が落成、十七年四月八日には外宮も完成した。二十六日には京都の吉田家より神明の御体代を奉送し、伊勢よりは御師高向二頭大夫光定も下向した。これより光定は参籠し、六月二十九日の夜に遷宮の式を行ったという。これが高嶺神明であり、やがて高嶺大神宮とも称し、しばらくのち後柏原天皇より勅額が下賜された。さらに今伊勢とも称した。「高嶺大神宮文書」(防長寺社由来所収)によれば、高向氏は後にもこより夫錢等を徴収しているので、関係は戦国時代末迄つづいた模様である。高向二頭大夫は伊勢山田の御師で、神宮の造宮二頭職を勤めたことから二頭大夫を称したらしい。この家は神官祠堂の荒木田・度会両氏以外の「異姓家」ではあったが、豊かな財力を有した山田の町の代表的有力地下人であった。(注1)光定は明応四年(一四九五)の頃から史料に現われ、同六年(一四九七)の内宮臨時仮殿遷宮には、御装束絹を献納したり、(注2)大永二年(一五二二)頃には、著名な連歌師宗長の御師でもあったから、京都の人々とりわけ貴族・大名層とも深い関係があったと推測される。將軍側近に在った大内義興とも関係を生じたことも想定される。大内氏は南北朝時代以降、豊前に進出し、室町時代には守護職を得て、その領国としたから、大内義興を檀那とした高向二頭大夫が豊前や筑前に進出し、檀廻りを行ったことは考えられよう。史料的には確認されないが、その後近世を通じて高向二頭大夫は、筑前国遠賀郡に御杖を配り、この地域の参宮者は必ず高向邸に止宿する例であった。(注4)これなども或はその痕跡かも知れないと考えられる。高向二頭大夫が豊前に活動した史料は見られない。ただこの後、宇佐宮に伊勢信仰がもたらされたことが、天文十八年(一五四九)の「宇佐下宮社司大夫永弘通種覚書」(大分県史料<sup>(24)</sup>所収)の記事から知られる。同年三月二十七日に、時の宇佐大宮司宮成公建家女中が山口の「今伊勢」参詣に出立し、四月十五日には宇佐へ帰着(下向)した。また四月九日には、永弘通忠も「今伊勢」に参宮し、同十八日には宇佐へ下向したとある。僅かこれだけの記事ではあるが、大宮司宮成家の女中(夫人か息女であろうか)や、番長職に在った永弘通忠が山口の神明社(大神宮)に参詣したことは、かなり強い御師の勧めがあったと見るべきであろう。高向大夫が関預したかどうかは明らかではない。この後、天文二十年には、大内氏が滅亡し山口は荒廢する。豊前―宇佐宮近辺―にも争乱が続いた。(注5)宇佐宮側に於いても具体的な伊勢信仰の史料は見当

らない。これを補うものが、同じく伊勢御師橋村大夫の御稜賦帳であるといえよう。「神人眼睫譜」(大神宮叢書(神宮神事考證中篇所収))によれば、橋村家は伊勢外宮祠官度会氏の後裔で元徳注進度会系図にも見える国正がその始祖である。その後非重代権禰宜家として継承され、都市自治組織として著名な山田三方会合の年寄家(三方家)を代表する最上級の御師であった。神宮文庫所蔵の「外宮権禰宜橋村神主家系」及び「橋村家譜略」によれば、国正より五代後の正家、正高の頃より西国へ下向すと譜に見える。これらの人物のうちここに掲げる賦帳に関係するのは、正高の子正治、正康、正房、正慶、正修の各代であろう。御師は例えば村山大夫の様に戦国時代には自身下向していたが、やがて手代とよばれる使者を派遣した。橋村氏は享祿五年には福屋治部、永祿・元龜には世木宗左エ門尉、慶長十五年には藤田二郎左エ門を遣している。これらは後世には大御師の手代をしながら、やがて独立の御師へ成長する。橋村大夫一族の史料も散佚し、内膳正修の系統(主膳家―幕末当主橋村正立)を嫡流とする家の史料が現在天理図書館の所蔵となっている。伊勢に残る数家の史料も未整理が多く、散佚した部分が大きい。橋村大夫の「御稜賦帳」のうち、宇佐宮関係者が見えるのは、享祿五年(天文元年一五三二)、永祿七年(一五六四)、元龜元年(一五七〇)、天正十四年(一五六六)、慶長十五年(一六一〇)の五点である。ただしこれらは原本ではなく近年の影写本である。原本の所在は不明、現存は神宮文庫の架蔵である。早く新城常三博士によって取上げられ学界に紹介されたが、中世に於ける御師の廻国とそれに伴う収益が知られる史料として注目された。同時に各地域に於ける伊勢信仰の受容状態を知る史料でもある。これらは表題を「中国・九州御稜賦帳」と付されているが、中国三ヶ国(石見・周防・長門)、九州六ヶ国(筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後)の中世末期までに橋村大夫家の檀那となった地域が国別に記される。記載は先ず地名が掲げられ、その地域の檀那が一族毎に記入される。名字のみの者、名(通称)のみの者、官途名のもの、寺・庵・社家は慶長に入ってから明記される。いずれもその地の有力者・土豪(地侍)名主層であると推定できる人々である。また人名の頭注の形で「状なし」又は○印が付せられる。これは御師の挨拶状である「嘉例状」の有無で、これにも檀那の階層地位による豎文・切文など紙質・大小の区別があった。(大名クラス―例えば肥前大村氏への宮後三頭大夫の賦帳には大たてふみとつねの状の区別がなされる。)あとに土産の品々が記載される。橋村大夫

は扇・帯・小刀と比較的少ないが、普通は、のし、おしろい、墨、打疊(紙)、茶、金紙の扇等種々の土産品が記される。御杖にも万度・千度・宮杖など区別が記される場合が多いが、この賦帳は比較的少い記載の部類に入れられる。本文は人名の箇条書きであるので末尾に一覧表の形でかかげる。

宇佐宮関係者は、宇佐郡(宇佐宮近辺)と小倉(到津庄)の二ヶ所に見える。小倉に居住したのは大宮司到津氏で、周知のように、到津氏は南北朝時代以来この地を根拠地にしていたからである。永祿の大友氏の宇佐焼打ち後しばらく宇佐宮が遷座していたこともあるという。到津氏は天正十四年の賦帳には見えないが、宇佐宮帰還後の慶長十五年には、宇佐の方で檀那として記載される。宇佐宮関係者で橋村大夫と師檀關係を結んだのは、到津氏をはじめ宮成・安心院の大宮司家、祝・益永・江嶋氏等の祠官層、矢部・秋吉・蟻木・辛嶋・麻生・上田等の神官及び永勝院・万徳坊・安門坊・心乗坊・円通寺・御許山の座主以下諸坊等、宇佐宮の上層祠官層はじめ弥勒寺など神宮寺以下の社僧達も多数その中に見えている。ところがかって山口の今伊勢へ参詣した永弘家やその他の祠官・庁分等神官層の氏名が見られないのは、おそらく他の御師の檀那となって配札を受けたのではないだろうか。天正十五年(一五八七)二月四日付宮成公基書状、同正月二十五日付益永統世書状、二月四日付祝宮通書状及び同年二月頃の佐田氏の書状等には(大分県史料所収清原宣雄所蔵文書)、彼らはいづれも伊勢御師福嶋御塩焼大夫(まき)から御杖大麻を受けていることが知られる。佐田氏より福嶋御塩焼大夫へ宛てた書状包書には、「是ハ橋村殿ヨリも御杖参り候由」と記されてある。この両御師のいづれが先に宇佐へ進出したのかは不明だが、天正年間には豊後国は大半が福嶋氏の檀所となっていたから、或はこの頃各地で激しく行われた御師の所謂「縄張争い」で檀那の争奪・拡張の競争が行われたのかも知れない。天正十五年の同じ時に、宇佐での有力者時枝隆令(公基の末交)や橋津・庄・江熊といった在地武士層にも福嶋大夫の使者御巫小彌宜大夫より御杖が届けられている。この時に大宮司宮成公基・永弘統世も福嶋大夫へ祈祷を依頼するとともに「必ず参宮を遂げたい」と申し送っているが、単なる外交辞令か否か真意は知り難いが、天正年間<sup>中世III</sup>に於いて豊後各地から多くの武士・農民(町人)層が、伊勢参宮を行っている風潮を或いは反映するものであろうか。(大分県史<sup>中世III</sup>第七章)

<p>享祿五年(天文元一五三二) 中国・九州御祓賦帳</p>		地名	人名
<p>宇佐</p>		<p>(小倉) 津</p>	<p>×(到) とう津殿 (波多間) ×同人内はたま 四郎左エ門</p> <p>○安門坊</p> <p>○秋吉大蔵</p> <p>×月のせの十郎太郎 (マ)</p> <p>○御許山座主</p> <p>×矢部殿 同人内</p> <p>×奥七郎二郎 (式部)</p> <p>×矢部しきふ</p> <p>×ときえたのかか殿</p> <p>×はうの殿(祝カ)</p> <p>○たかむらの橋東の まこ三郎</p> <p>×おさか殿</p>
<p>(安心院)</p>		<p>永祿七年(一五六四) 中国・九州御祓賦帳</p>	<p>○安心院殿 同人内</p> <p>○くちの原外記 同人内</p> <p>○長石主計 同人内</p> <p>○城民部</p> <p>○佐田殿</p>
地名	人名	<p>(小倉) 津</p>	<p>○はたま四郎左エ門 (到)</p> <p>○至津殿 奏者</p> <p>○清末中つかさ いたう津</p> <p>から嶋左馬 か(關)</p> <p>う(宇佐) さ</p>
<p>おもと山</p>		<p>(うなせ)</p>	<p>○心乗坊</p> <p>○浄光坊 (万)</p> <p>○満徳坊 同人内</p> <p>○喜多院</p> <p>○秋吉二郎左エ門尉 (麻生か)</p> <p>○宇佐民部 (益永)</p> <p>×秋吉大蔵 (益永)</p> <p>○ます長殿</p> <p>○一來房 当年参宮</p> <p>○うなせ善左エ門尉 ツル</p> <p>○宮成殿</p> <p>○ツルノ木工</p> <p>○矢部殿</p> <p>○上田のわかさ</p> <p>○祝殿</p> <p>○上田小三郎 (坂カ)</p> <p>○小坊殿</p> <p>○正学寺</p>
地名	人名	<p>元龜元年(一五七〇) 中国・九州御祓賦帳</p>	<p>あちむ</p> <p>○いしがき坊</p> <p>○西ノ坊</p> <p>○安心院殿</p> <p>○長石主計</p>
地名	人名	<p>こくら</p>	<p>○至津殿 同人内</p> <p>×清末中務 同人内</p> <p>×はたま殿</p> <p>唐嶋殿</p> <p>から嶋左馬</p> <p>う さ</p>
<p>浄光坊</p>		<p>心乗坊</p>	<p>永昌院</p>

<p>喜多坊<sup>(マ)</sup> 秋吉大藏 麻生民部 益永殿 宮成殿 矢部殿 祝殿 小坂殿 鶴野喜左エ門 ×かめ山しやうけん ツルノ木工助 うぬめ殿 おもと山 ○正覚寺 ○石垣坊 ○西の坊 ○座司坊<sup>(マ)</sup> ○安心院殿 ○長石主計</p>	<p>天正十四年(一五八六) 中国・九州御被賦帳</p>	<p>宇佐郡分 有徳坊宿 円通寺 安門坊 心乗坊 浄光坊 仲明院 喜多坊<sup>(脱カ)</sup> 万徳坊 紹心斎 実相院 石垣坊 秋吉大藏亟 麻生民部亟 麻生中務亟</p>	<p>地名 人名</p>
<p>益永殿 矢部殿<sup>(マ)</sup> 宮城殿<sup>(マ)</sup> 祝大夫 江嶋主膳佐<sup>(マ)</sup> 清助太郎左エ門 ツルノ善左エ門 全 木工允 ○有徳坊 やど ○麻生彦左エ門 ○小太郎 ○弥拾郎<sup>(麻生)</sup> ○同 浄泉入道 ○浄光坊 ○藤垣小兵衛 ○同勘七 ○満木与介 ○秋吉新兵衛</p>	<p>（か 閑） （あちむ） （おもと山） （はうき やうし） （うなせ）</p>	<p>庄内藏助 ×吉松殿 上田若狭守 上田伊賀守</p>	<p>慶長十五年(一六一〇) 九州御被賦日記</p>

○浄蔵坊			
○喜多坊			
○麻生嶋甚右工門			
○麻生嶋勘三郎			
○永勝院			
○安門坊			
○真乗坊			
○万徳坊			
○同隠居			
○高月彦五郎			
○源右工門			
○中明院			
蜷木右近			
○至津殿			
○祝大夫			
○橋本三郎右工門			
○清祐彦七郎			
○清祐太郎右工門			
宇佐宮			
○松馬源左工門			
○宮成殿			
○江嶋豊坊			
○山香与左工門			
○同吉蔵			
○田中平次郎			
○同平三郎 (田中)			
○同藤次郎			
○同助左工門			
○門松藤蔵			
○田中長吉			
○和喜甚六			
元明殿			
○宗惣左工門			
坊之甚三へもん			
○江嶋久六 当年御参宮			
実松坊・石垣坊 ・円通寺			
小坂(殿脱)			
御許山	御許山	御許山	御許山
谷之坊	谷之坊	谷之坊	谷之坊
○石垣坊	○石垣坊	○石垣坊	○石垣坊
○成就坊	○成就坊	○成就坊	○成就坊
○東之坊	○東之坊	○東之坊	○東之坊
○西之坊	○西之坊	○西之坊	○西之坊
○上田与作	○上田与作	○上田与作	○上田与作
上田作右工門	上田作右工門	上田作右工門	上田作右工門
辛嶋	辛嶋	辛嶋	辛嶋
辛嶋弥拾郎	辛嶋弥拾郎	辛嶋弥拾郎	辛嶋弥拾郎
○辛嶋太郎右工門	○辛嶋太郎右工門	○辛嶋太郎右工門	○辛嶋太郎右工門
○同平次郎	○同平次郎	○同平次郎	○同平次郎
○对馬守	○对馬守	○对馬守	○对馬守
(对泉守とあり)	(对泉守とあり)	(对泉守とあり)	(对泉守とあり)
河辺三右工門	河辺三右工門	河辺三右工門	河辺三右工門
金丸又二郎 当年参宮	金丸又二郎 当年参宮	金丸又二郎 当年参宮	金丸又二郎 当年参宮
○友岡友右工門	○友岡友右工門	○友岡友右工門	○友岡友右工門
(以下略)	(以下略)	(以下略)	(以下略)

〔凡例〕

一、人名の○印は「状」(嘉例状)

と記入のあるもの、又は原本に

○印のあるもの。

二、×印は、状なしと記載されているものを示した。

三、「土産物」は省略した。

四、原文は人名には全て殿を付すが

ここでは名字のみの分には殿を

残した。

五、( ) の地名は筆者の補足である。



橋村大夫は、これ以降も豊前(但し京都郡以南に限られる)に配札を行ったことが、極めて断片的史料ながらうかがわれる。  
 (伊勢市 橋村文書) また宇佐宮杜家にも配札を行ったことが、嘉礼状の残存(宇佐市種田文書・乙摩文書)や橋村正立(御師廢止時の当主)の御神号軸(全上)の残っていることでも窺われるのである。伊勢神道の影響等についても門外漢であるが、宇佐宮杜家(大神姓某)の著した「私談

漫録」(寛政元年の奥書を有す)という神道書(筆者蔵)の中にも外宮(度会)神道の影響が見えることを触れて、伊勢御師(ほとんど外宮御師)の宇佐宮への思想的影響の一端を指摘するにとどめたい。

ざんげの目  
 宗碩は管領細川高国の命で参宮した。宗長とも親しく、さらに宗長の師宗祇は大内政弘(義興の父)の時には山口に下向していた。  
 幕末に参宮した遠賀郡底井野の小田宅子の紀行「あつま路の日記」(福岡女子大学所蔵)など近世遠賀郡よりの参宮日記に登場する。能美安男「伊勢参宮」(研究会、年報五、和五六年) 六号 昭

(1) 西山克「道者と地下人」

(2) 『神宮遷宮記』巻四

(3) 宗碩「さのわたり」(『神宮参拜記大成』)宗碩は管領細川高国の命で参宮した。宗長とも親しく、さらに宗長の師宗祇は大内政弘(義興の父)の時には山口

(4) 幕末に参宮した遠賀郡底井野の小田宅子の紀行「あつま路の日記」(福岡女子大学所蔵)など近世遠賀郡よりの参宮日記に登場する。能美安男「伊勢参宮」(研究会、年報五、和五六年) 六号 昭

(5) 『大分県史料』24到津文書にはその後の宇佐宮内外の争乱を記録する。例えば到津文書四〇三号・四〇五号・四〇九号・四三一号・四三二号等。

(6) 神宮文庫所蔵

享祿五年の賦帳豊前国の冒頭部分

(神宮文庫所蔵本 影写本)

一正勝

- (7) 山口県古文書館所蔵「村山家蔵書」村山武恒覚書。神宮文庫蔵「村山武慶萩下向日記」
- (8) 『神宮御師資料』外宮篇一～四（皇学館大学史料編纂所編、資料叢書）
- (9) 天理大学所蔵橋村大夫文書にはなお数十冊の御被賦日記が残るが筑後・肥前が多く、豊前の関係とくにここに紹介したものは入っていない。
- (10) 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』昭和三十九年増書房、なお五十七年五月には、『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』として再刊。
- (11) 福島氏も外宮祠官度会氏の庶流で室町時代宝徳年中に亀田氏より分出した。外宮土宮の御塩焼物忌職を相伝したので御塩焼大夫と称した。橋村氏と並ぶ山田の最有力御師で三方年寄家であった。（神人眼陸譜）
- (12) 福嶋御塩焼大夫が豊後に進出した年代は、歴代祈禱者注文（朝見八幡宮文書・大分県史料(11)）から大友親治を檀那とした年代であるとされる。（大分県史中世Ⅲ）明応五年から大永二年の間（一四九六～一五二二）、高向大夫と大内義興が師檀関係を結んだ年代でもある。なお橋村大夫は豊後国には西国東郡の真玉付近・日田付近までを檀所としていた。

（皇学館大学教授

## 会 告

大分県地方  
史料叢書(六)

『豊後国旧県管地沿革記』・附録『豊後国各郡沿革記』 (A5版)  
(一八八頁)

※ご希望の方は事務局へ、会員一八〇〇円（〒共）会員外二五〇〇円

大分県地方史研究会